

意味している。イスラームは日常行為と、宗教的実践行為を区別することなく、共にムカッラフ(能力者)概念に基づく行為責任者の信仰としてイスラーム信仰を位置付ける。一日五回の義務の礼拝において、「信仰告白(唯一神アッラー以外に神はなし、ムハンマドは神の使者である)」を九回唱え、この信仰告白を教義としては六信の第一項として、実践としては五行の第一項として位置付けるイスラーム信仰におけるムカッラフ(能力者)概念は、イスラームが拒否も可能であった選択肢の中から信仰を選択する知性の働きであり、本能を統御する信仰実践をムカッラフ(能力者)概念を基礎として自覚する。本能であれば習わずにすむことを、本能の統御を根拠とした故に、信仰を聖典『クルアーン』と預言者の言行『ハディース』を、アッラーの「導き(フダー)」を拠り所として実践し、現世の幸福と、来世における業火の懲罰を逃れることを目指すイスラーム信徒の姿が見えてくる。本能を抑えて、信仰を選択したムカッラフ(能力者)がその知性の働きを通じて日常生活と信仰生活とにおいてアッラーの導きを根拠に主体的に選び取った信仰実践の結果を、信仰実践を木に実る甘き果実であるとして、「信仰の甘美さ」と呼ぶのである。イスラームにおける死生観は、ムカッラフ概念を基礎として、生においては現世の幸福を、死においては来世での業火の懲罰を逃れることであり、そのための日常生活と信仰生活の実践が行われるのである。ムカッラフ概念はそうした意味からイスラーム信徒の主体的死生観を理解する契機であると言えるのではないだろうか。

〈下への超越〉と〈将来する浄土〉

——武内義範の「信楽の思惟」——

高田 信良

○「本願を信じ念仏を申さば仏に成る」(『歎異抄』第十二章) 仏教における死生観は「往生」を要として語られる。仏の国、浄土に往生(往き化生)して成仏するのが仏教徒の究極的関心事である。「生死いづる道」「浄土往生」を求めるなかで出遇われた〈念仏・信心〉(親鸞)は、仏教死生観を生きるひとつの在り方である。武内義範(一九一三—二〇〇二)が『教行信証の哲学』『親鸞と現代』にて思索する「信楽の思惟」を通して仏教における「死生観と超越」について考察する。

○「下への超越」「将来する浄土」との表現は『親鸞と現代』にて見いだされる。いずれも、〈ひねった表現〉であるが、武内の思索を特徴づけるものである。長谷正當は「武内義範の思想をその根本において方向づけ、導いている鍵概念を取り出すならば、トランス・デサンダンス(下への超越—人間の有限性の自覚のうちに降りてゆくこと、有限性の自覚とその超克の問題)がそれである」と指摘している。もうひとつ、「将来する浄土」「超越者との遭遇」が、武内の思索における鍵概念といえるだろう。そして、両者には、〈有限性の自覚のうちに降りてゆくことがその超克となっていく〉とのことがらの思索が「将来する浄土」の議論となるという仕方で不可分の連続性が見いだされるのである。

○「下への超越」(transcendental 逆超越論的)とは「自己自身が無限に自己の根底に深まっていくことにおいて、根源

にある無限の罪の自覚というものに触れる」ことである。武内はそれを「二種深信」に見いだす。(善導が説く)「至誠心」は親鸞の解釈によって懺悔の言葉となり、「機の深信」(自分が救いようのない罪人であることの自覚)となる。そして、そのままそれが「法の深信」(阿弥陀仏がそのような罪人を救済することを深く信じて疑わない)として阿弥陀仏の救済を信ずるという心と結びつく。

○「将来する浄土」。「われわれが行信とか信仰とかの立場にたつときには、いつも往相・還相という二つの廻向の世界の中に生きている——私自身の表現に従うと——将来する浄土というものの中に生きているのであるが、時間はそこでは未来から現在へと将来してきている。その未来から現在へ将来してきている時間というもので、われわれはほんとうに宗教的な人間として、宗教的実存として、初めて自己自身の信仰と自己自身の行為というものを自分自身にもたらすことができる。」

○武内は『教行信証の哲学』にて(「三願転入」に関して)述べる。「自負していたいわゆる第十八願が、自己の深奥に自力の執心を発見すれば、自負していた第十八願は自己を第二十願に貶してしまふ。そして一度第二十願に落ちることによってかえって逆に第十八願に浮かび上がる。……第十八願の精神はただ一度第二十願から転入して第十八願となってしまうのではなく、第十八願は絶えず第二十願を自己疎外によって成立せしめつつ、またさらにそれを消滅契機として否定し、第十八願に転入し続けねばならない」。この思索(傍線部)は、武内がヘーゲル『精神現象学』(意識の経験の学、精神の現象を叙述)の

思索を手がかりに(親鸞思想)を追思索していることを示している。武内の生涯にわたるさまざまな思索(関心)は、仏教に生きる者(「本願を信じ念仏を申さんとする」念仏者としての宗教的精神)の有り様を追思索せんとするものであったといえよう。

○本願を信じ念仏を申さば(「往生して」仏に成る)を「機の深信」・「下への超越」(の思索)が語り、(本願を信じ念仏を申さば)「往生して」仏に成るを「法の深信」・「将来する浄土」(の思索)が語る。「下への超越」(の思索)は「将来する浄土」(の思索)へとおのずとつながっていく、そのような武内の思索を「信楽の思惟」と特徴づけることができる。

パネルの主旨とまとめ

高田信良・氣多雅子

本パネルは、龍谷大学ORC「死生観と超越——仏教と諸科学の学際的研究」・unit2「宗教多元世界における死生観と超越の対話的研究」の研究報告のひとつとして企画された。

○(氣多雅子氏からのコメント) 従来から扱われるテーマであるが、本パネルの特徴は、現在の我々が「宗教多元的世界」を生きているとの認識のもとに、天理教、キリスト教、イスラーム、仏教における死生観と超越の観念の新しい形を、対話しつつ探究しようとする意図にある。それがどのような点で新しいかということは、次のようにまとめられる。

第一に、超越が人間の卑近な現実の場面から考察されていることが注目される。(澤井) 諸井慶徳は、宗教的信を成り立た